

DOJIN
R18
成人向け
18歳未満の
購入・閲覧禁止

SHUNDOHARTWORKS



「おはようございます
お兄様♡」

「今朝はパンケーキに
挑戦してみたいんです」

カキ

カキ

「楽しみに
待っていて下さるね♡」

リビングに入ってきた俺に
佳樹が元気な挨拶をしてきた

カキ

寝ぼけ眼の俺は
せつせと働く妹の姿を
何気なく眼で追っていた

カキ

手持ち無沙汰を
感じた俺は

邪魔にならない程度に
手伝いをする

甘い匂いを漂わせる
出来上がったばかりの

パンケーキを
テーブルの上に置くと

俺と佳樹は一緒に
食べ始めた。

カキ

カキ

カキ

ぬい



嬉しそうな表情をした佳樹が

クルリとこちらに
向き直る



「お兄様、パンケーキのお味はどうですか？」



俺は称賛の言葉を
伝えると

ご褒美として佳樹の頭を
優しく撫でて上げる



そして、俺の頬に付いた
クリームを

指先ですくい取り
舐め取ってしまった。



俺と佳樹は片付けを
済ませると

学校の準備を始める

さあ今日も長い一日が
始まりそうだ。



「見て...ぬっくん♡」

「今日の為に
買って来たんだよ」

ぴん

商業施設の裏に入った
焼塩檸檬がスカートを捲り

勝負下着を見せてきた

周りに人が居ないとはいえ、
大胆なコトをする焼塩は

今度はニットを捲り
日焼けしていない胸を
俺に見せてくれた



ぴん

「あ...ッ!？」



「あ...ッ触ってくれる？」

より一層エロさを
醸し出していた

日焼けをしていない
焼塩の胸はきめ細やかな
肌触りをして

毛

毛

毛



焼塩を突き上げるかのように
俺は膣内へと侵入した。



いつもと違う焼塩の姿に
股間を隆起させた俺は

焼塩のパンツを脱がせると
チンポを密着させ擦り付ける

「こ...外だよぬっくん
こんな場所で
本当にしちゃうの？」

毛

毛

毛

俺は壁に手を付いた
焼塩を後ろから激しく突く



「あ…ッ！ぬつくんのが
奥に当たってるッ♥」

焼塩の膣内は食べて貰うのを
待ってた『檸檬』のように
果汁で溢れかえっていた



「あッ…ああ、だ…ダメえ
これキモチよすぎて」

「いつもより
感じちゃってるよ♥」

普段聞くことのない
女の声を上げる焼塩に

俺は勢いよく腰を打ち付け
子宮口や膣壁を味わう



「ぬつくんッ出して…ッ
私の子宮内に
ピュピュって出して♥」



絶頂が近い焼塩が
大胆なお願いをしてきた

「んッ！んん…ッんんッ
ん…ッ♥♥」

俺は辺りに響く焼塩の
淫靡な声を唇で奪うと

焼塩の絶頂と共に
子宮内へと
射精するのだった。



小鞠の乳首を指先で
触ると薄い胸の上で

女であることを
主張するかのように
ピンと勃起した

俺は指先に唾液を付けると
さらにその乳首の先を

十字キーの様に
クリクリと動かしてみる

眠っている小鞠に
悪戯をして

どこまでヤツたら
目を覚ますのか
俺は挑戦していた

流石にこの程度のことでは
小鞠は起きそうに無い

小鞠のパジャマ越しの
アソコを押ししてみる

グリグリとそれ程
強くない力で
アソコを押ししてみると

パジャマの皺が恥丘の
シルエットを形成して
エロく見えた

これでも小鞠は
目を覚まさない…

俺は更に大胆な
行動に出る

小鞠のズボンと下着を
一緒に引っ張り秘部を
露にしてみた

そして、小鞠の下半身を
丸出しにして

さらに大胆なイタズラを
してやろうと思う



「お前のソーセージは、粗末で小さい……」

モニユモニユと口を動かし堪能する小鞠だが……



俺が小鞠の顔にチンポを近づけると……

「温……水……」

小鞠が俺の名を呼んで目の前のチンポを啜えた



ツルツルの小鞠のマンコに挿入をしてセックスを始めてしまった

寝言で自慢のチンポを小さいと言われた俺は



「お……おしゅ……」

小鞠の寝言と共に俺の下腹部に生暖かさと尿の匂いが広がっていく



「ん……ん……う」

俺は小鞠を上に乗せると下から奥をズンズンと突く

フラフラと揺れる小鞠を支え膣内射精してやろうとしたその時



「ぬあッ!? ベ……ッ便座が温水に変身した!」

オシッコを出し終わった小鞠がついに目を覚ました

「保健体育のテスト勉強を
していたら、」

「志喜屋先輩にこの服を
着せられたんです!!」

相変わらず志喜屋先輩の
玩具にされる天愛星さん

もも

何故か保健体育の
テスト勉強を始める
天愛星さん

「こっつ…これが
男子の性器…なんですね」

俺のパンツを引っ張り
中を覗き込む

もも

もも

「実物は図解のように
グロテスクな形では…え!」

俺は天愛星さんの目の前で
ペニスを勃起させてしまった

「まさか、私の淫らな姿を
想像して大きくしたんじゃない?」

「つ…っ次は
私の番ですよね…」

「前から見られるのは
恥ずかしいので
後ろから観察して下さい」

天愛星さんは
タイツを下ろすとお尻を
こちらに向けてきた

天愛星さんに
気つかれないよう
俺は菊門に舌を這わせる

「っ!? 触って欲しいとは
言ってますん…って
コレ舐めてるんですか!」

「ふあああッ!
や…っ止めてください!!」

志喜屋先輩から天愛星さんが
アナルが弱いと聞いていたが
こんな簡単に絶頂するとは
思わなかった。

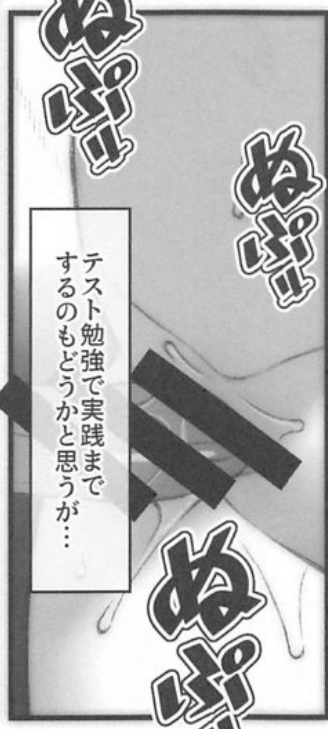
「ひぐ…ッ!」

志喜屋先輩から天愛星さんが
アナルが弱いと聞いていたが
こんな簡単に絶頂するとは
思わなかった。

俺と天愛星さんはセックスを始めた…



「温水さん、これはあくまでも勉強ですからね!!」
「そのときは、間違えないで下さいね!!」



テスト勉強で実践までするのと思うが…



「温水さん…このまま続けていたら男子は射精をするんですよね?」

「少子化も進んでいますし、子育てを学ぶのも大切な勉強だと思っうんですが…」

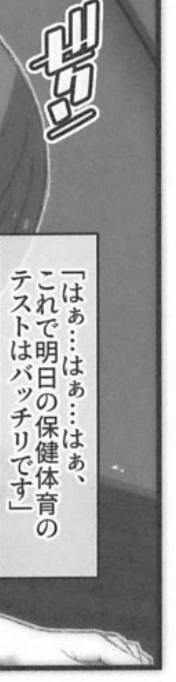
天愛星さんは暗に子宮内射精を要求しているようだ

「何度も言いますがこれは勉強ですからね!」



「本当に只の勉強なんですからね!!」

俺は天愛星さんの一番深い所で射精する



「はあ…はあ…はあ、これで明日の保健体育のテストはバッチリです!」

保健体育だけ高得点を出すのもそれはそれで恥ずかしいと思うのだが

余韻に浸る天愛星さんには黙っておくことにした。

取って欲しいと言われた
振動するボタンを求めて

「隠す場所が無かったので
下着の脇に
止めていたのですが…」

俺は『白玉リコ』の
ウェディングドレスの中に
潜り込んでいた

「動いているうちに
下着の中心に落ちてしまい」

膝を着いて見上げると
そこには

愛液で濡れそぼった下着と
雌の匂いを放つ股間が

俺は小陰唇の隙間から覗く
クリツカーの片割れを摘まむ

「ッ……ああ!」

ヌルヌルで滑るボタンを
俺は慎重に引き抜いた

白玉さんに取れたことを
告げた俺は

スカートの中から
外に這い出る

すると…ウェディングドレスの
胸元を下ろした白玉さんが
恥ずかしそうに咬く

「ぶ…部長さん、私…
このままじゃ出れません…」

「私と…その…私とセックス
して頂けませんか?」

ドキ

ドキ

クモ

ドキ

ぽん

俺は白玉さんの白玉の様な
プニプニおっぱいを握る

それは吸いつくように柔らかく
ずつと揉んでいた感触だった

柔らかい手触りを楽しんだ
次は食感を楽しむ

「オっぱいを吸ってる部長さん…
まるで赤ちゃんみたいですよ♥」

白玉さんの熱を帯びた声を
聞きながら甘噛みをする

乳房の中心に
小さな突起が出現した

「ああッ……部長さん
乳首がキモチいいですよ♥」

白玉さんは俺の頭を
抱きかかえ

甘やかすように
頭を優しく撫でてくれた

ウエディングドレスを捲り
準備の出来上がった
白玉さんの秘部に

俺はチンポを
そつと押し当てる…

「お願いします…」と
小さく呟いた

接触の感覚に反応した
白玉さんは…

入口の柔らかい場所から
拒むように狭くなる

「ん……あ、ああッ
部長さんが私の中に入って…」

俺は奥へ奥へと
ゆつくりと腰を進めた

ぱん

ぱん

ぱん

「それもこの様な記念日に」

「……こんな形で卒業する
なんて思いませんでした……」

ぽん

俺は彼女に遠慮して
浅い場所を攻めていたが……

ぽん

俺の動きに腰を合わせる

白玉さんは破瓜の痛みに
耐えながら

ぽん

ぽん

ぽん

「激しく突いて下さい」

「全てを忘れるくらい
もっと激しく……」

「部長さん……私の事は
気になさらないで下さい」

ぽん

ぽん

ぽん

「ぶ……部長さんが奥に当たって
コレ……あッあッ……凄いかもッ」

ぽん

ぽん

彼女を抱き抱えると
深くつながれる体位に
体勢を変えた

物足りなさを感じていた俺は
白玉さんの言葉に甘え

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん

ぽん



埃まみれの床に腰を下ろした

絶頂する瞬間の白玉さんを見たいと思った俺は



白玉さんは熱を帯びた吐息で俺の耳元で囁く

「妊娠しても構いませんこのまま部長さんを…」



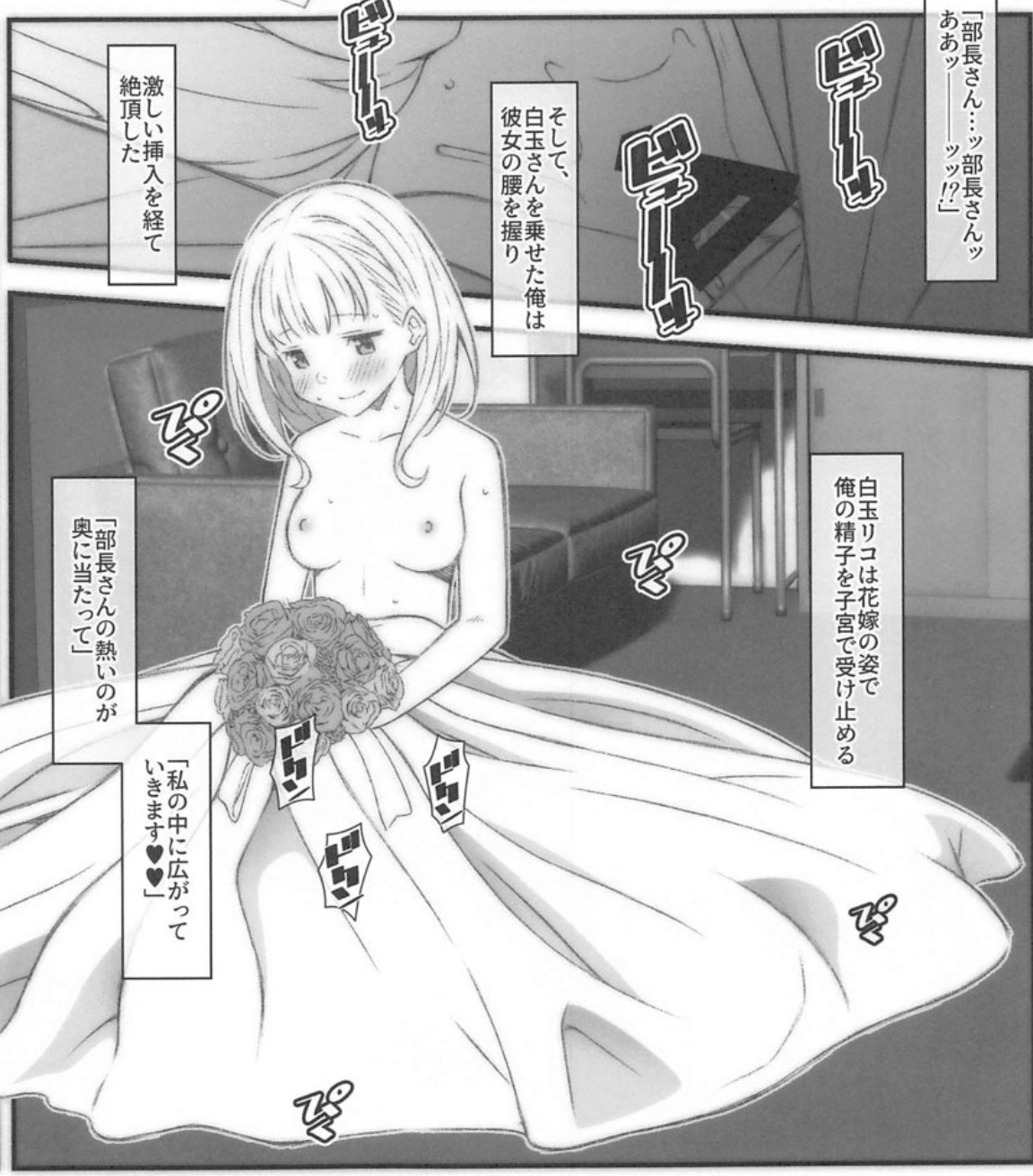
「部長さんを私の膣内へ注ぎ込んでください…」



「それじゃ行つてきますね部長さん♥」

そう言う白玉さんは実姉の結婚式に参加する為部室を出て行った…

俺の精子をその子宮に溜めたまま…



激しい挿入を経て絶頂した

そして、白玉さんに乗せた俺は彼女の腰を握り

「部長さん…ッ部長さんッ ああッ…ッッ!」

白玉リコは花嫁の姿で俺の精子を子宮で受け止める

「部長さんの熱いのが奥に当たって」

「私の中に広がっていきます♥♥」



ん……

この精子の濃さだと…
今日のお兄様は
7回でしょうか？



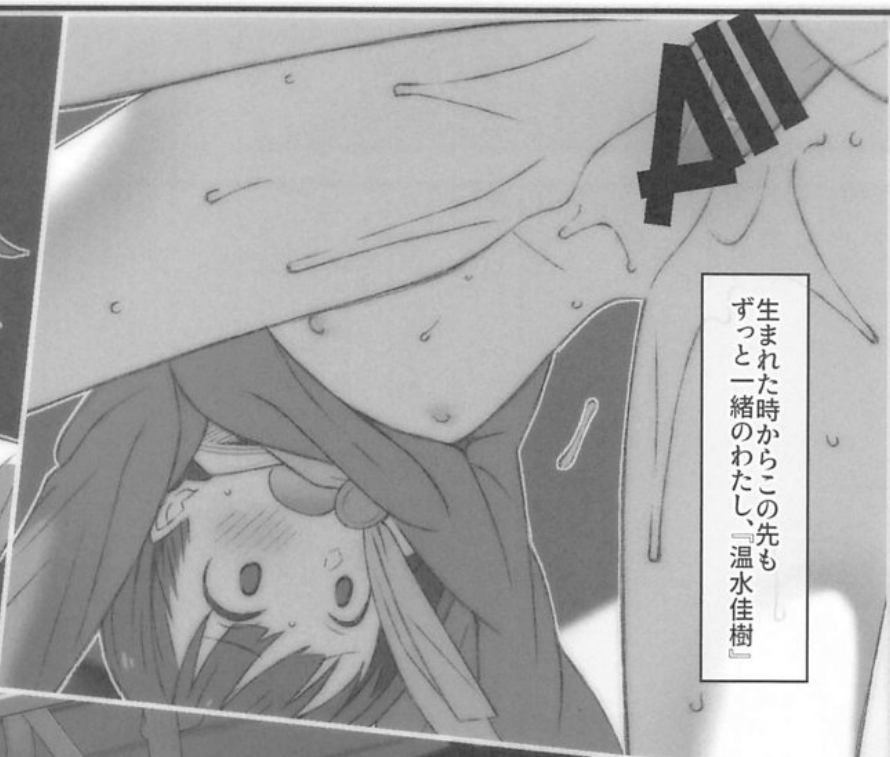
「お兄様、佳樹の口の中に
射精して下さい♥」

その放たれた精子を
私は舌先で転がし、
今日の成果を確認します

ピュッピュッと
お兄様の熱い精子が
佳樹の口の中に放たれます



太陽のように明るく
とても綺麗な『焼塩檸檬』さん



生まれた時からこの先も
ずっと一緒のわたし、『温水佳樹』



美味しくご飯を食べてくれる
素敵な『八奈見杏菜』さん



文芸部の後輩で
キャラ被りの『白玉リコ』さん



家庭的で親しみやすい
『小鞠知花』さん



猫耳メイドの似合う
生徒会副会長の
『馬剃天愛星』さん



この中で一番最初に
お兄様の赤ちゃんを授かるのは
いったい誰なのでしょう？



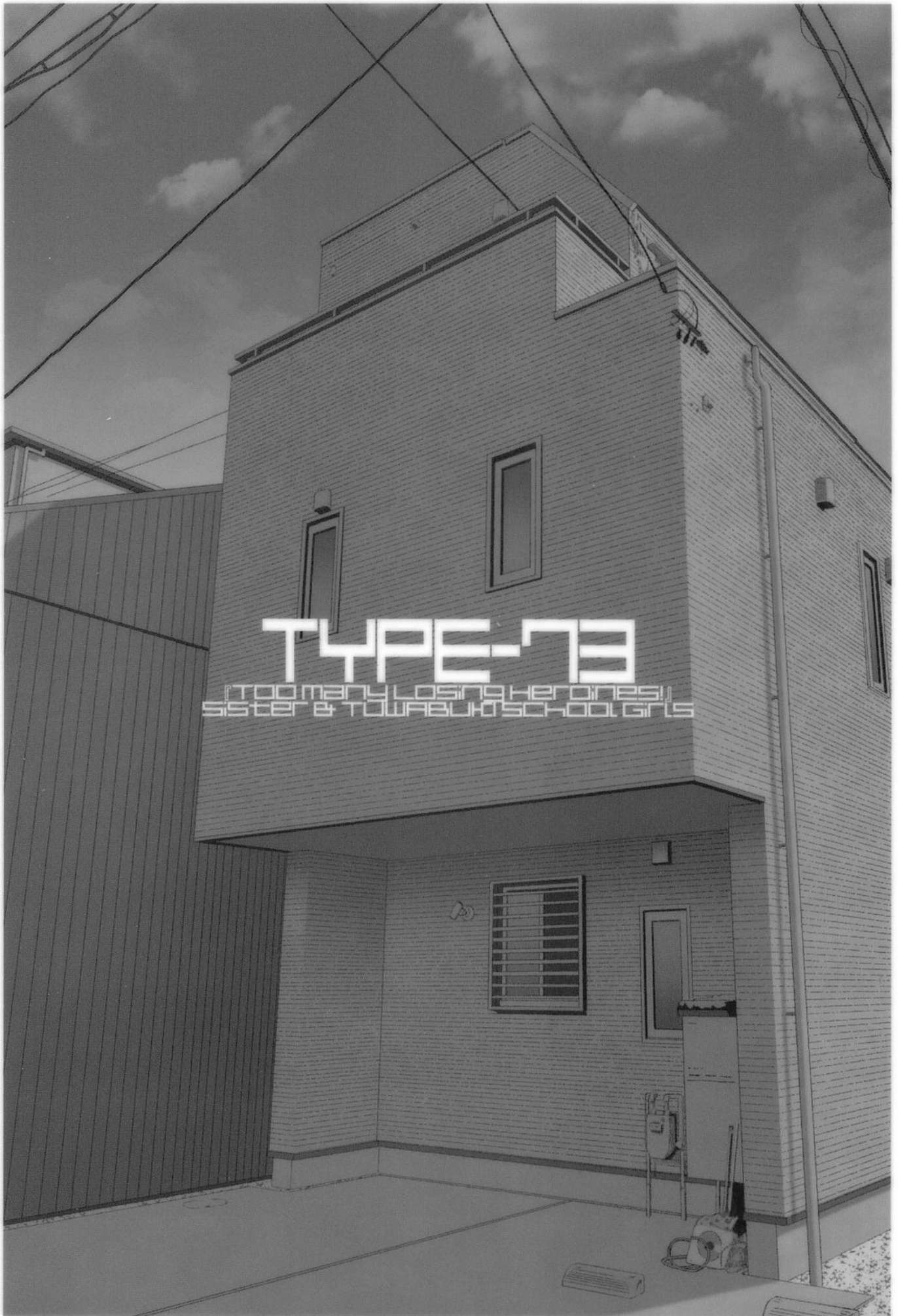
おっ……



順調にお兄様の愛は
広がっているようです♥



■作品名:TYPE-73
■発行日:2024/10/20(初版)
■発行元:TYPE-57
■発行者:Frunbell
■連絡先:<http://guda3.blog64.fc2.com/>
■印刷所:Sunrise Publication
■注意:18歳未満の閲覧禁止 無断転写・転載・複製禁止



TYPE-73

(TOO MANY LOSING HEROINES!)
SISTER & TOWABUKI SCHOOL GIRLS